

## 《小坡の誕生日》

老 舍

(訳 萩田麗子)

### (一) 小坡と妹

<sup>シアオポー</sup>小坡の兄さんは父さんが<sup>ダーポー</sup>大坡〔シンガポール川の南側地区一帯の呼称。早くから華僑が住みはじめた地区〕というところで中国製の雑貨の店を開いているときに生まれたので大坡と呼ばれている。小坡は父さんの店が<sup>シアオポー</sup>小坡〔シンガポール川の北側地区一帯の呼称〕に引っ越した後に生まれたので小坡という。兄さんの名前ほど大らかな感じもしないし響きもいいわけではないが、名前の由来はちゃんとあって何もおかしくない。

だが妹が生まれた時、店は小坡にあったのに、どうして妹を小坡とか小小坡、二小坡と呼ばずに、わざわざ<sup>センポー</sup>仙坡と呼ぶのか。小坡は妹の名前を呼ぶたびに少しばかり疑問を感じてすっきりしなかった。家や学校や近所を歩き回りいろいろなところで聞き込みをしたが、シンガポールには仙坡と呼ばれるところはない。これはいったいどういうことなのか？ これは、「妹はどうして女の子なのか」ということと同じように難しい問題だ。兄さんはどうして女の子じゃないのか？ 妹を小小坡とか二小坡とか呼ばずに、どうして仙坡と呼ばなければならないのか？ ああ！ もう考えるのはやめよう。考えはじめるとわけがわからなくなってしまう！

母さんはこう言う。「大坡はあっちで生まれたからで、小坡と仙坡はそっちで生まれたからよ」

これではもうますますわけがわからなくなってしまう。時にはこう言うことも

ある。「兄ちゃんは大坡ダーボーの溝の中から拾ってきて、小坡シアオボーは小坡にある電信柱の  
ところから拾ってきて、妹はバナナの葉の中から抱っこして連れてきたんだよ」

あーあー！ バナナの葉と仙坡という名前には何のつながりもないじゃないか。  
それに「生まれた」と「拾ってきた」ことってのは、同じことなのか、違うこと  
なのか。「母ちゃん！ 母ちゃんは何てとぼけてるんだい！」

母さんがとぼけているのはまちがいないとして、わけがわからないままでいる  
しかないのだろうか！ 父さんに聞きにいけって？ だめだ！ 父さんは世界一と  
つつきにくい人なんだ。何か聞かれて答えられずに首でも振ろうものなら、すぐ  
にほっぺたをひっぱたかれる危険がある。でも、父さんに何か聞くと、知ってて  
言わないのか、本当に知らないのかはわからないけど、いつもしかめっ面をして  
言う。「つべこべ聞くな！」「あいつの口を縫ってしまえ！」

口を縫われたら歌が歌えなくなるのはまだいいとして、バナナを食べられなく  
なったらどうすればいい？

兄さんに聞いたらって？ ふん！ だれがわざわざ兄さんに聞きに行くものか。  
兄さんは絵の入った本を隠して見せてくれない。兄さんのことを思い出しただけ  
で小坡は腹が立ってくる。小坡は愚痴を言う。「見てろよ！ 大きくなって金を  
もうけたら、すぐに二角もする本を買うんだ。やまほど買うんだ。全部絵の入っ  
た本だ。絵のところを破って背中に貼り付けて、みんなに見せびらかしてやるん  
だ！ ふん！」

妹に聞いたらって？ ああ、小坡はもう何回も聞いた。妹はいつも二本のおさ  
げ髪を揺らしながら走っていき、甘えた声でこう叫ぶ。「母ちゃん！ 母ちゃん、  
兄ちゃんがまた聞くんだよ。どうして仙坡センボーっていうんだって」

すると母さんは仙坡をそばにおいて、小坡と一緒に遊ばせてくれない。このよ  
うなお仕置きが、小坡にはいちばんこたえた。というのは、父さんは仙坡をかわ

いがっているし、母さんも兄さんもセンボー仙坡をかわいがっているが、いちばん仙坡をかわいがっているのは自分なのだ、だと思って、いつも得意になっていたからだ。妹を可愛がらない二番目の兄さんなんて、この世にいるはずがない！

「きのうの夜、妹につやつやしたビンロウの実を二つあげたのはだれだ？ このシアオボー小坡ではないか！」小坡はまるまるした足の指を一つ一つ折り曲げながら数えていった。「おととい雨が降ったとき、通りから家まで妹をおんぶして帰ってきたのはだれだ？ この小坡だ！ ぼくと遊ばせてくれないなんて、ふん！ あの日、ごはんのとき、妹と口げんかしたのはだれだ？ ぼく……」と、ここまで考えると、小坡は足の指をひとつ元に戻し、これはまったくなかったことにした。足の指を使って数えるのはこんなふうな利点がある。具合が悪いときには指を元に戻せばいいのだ。

やっぱり母さんに聞きにいったほうがいい。母さんの話は毎日変わるけれど、とっても面白い。答えをせつくと、母さんは世界中でいちばん優しくてきれいな二つの目をちょっとくるくるさせてこう言う。「おまえの妹のことを仙坡というのはね、夜中に白ひげの仙人が連れて来たからなんだよ」

小坡はこの答えはとっても面白いと思った。そこで、テーブルの下に隠してあったザボンを指して言った。

「母さん！ きのうの夜、ぼくもその白いひげの仙人を見たよ。仙人は言ったよ。『小坡、お前にこのザボンをあげよう』って。そしてザボンをテーブルの下に置くと行っちゃったんだ」

母さんはしかたなく、ザボンの皮をむいてみんなに食べさせてくれたが、それからはもう白ひげの仙人の話はしなくなった。妹がどうして仙坡と呼ばれるのか、あいかわらずわからないままだ。

ダーボー大坡が学校に行くのは、勉強して両親に気に入られたいからだ。小坡も学校に

は通っているが、しょっちゅう学校をさぼっている。頭痛のふりをして家で寝ていると母さんがちよくちよく見にくる。だから思い切り遊べないし、それに母さんが来ると「ウン、ウン」とうなり声を出さなきゃならない。「ウン、ウン」と言っていると可笑しくてたまらなくなる。「ウン、ウン……フフ」と吹き出してしまう。母さんに見破られても大したことはない。二、三回たたかれても痛くなんかない。ただ、母さんにはちょっとした悪い癖があって、何でも父さんに言いつける。父さんが帰って来ると、すぐにくどくどと、針の先ほどの小さなことまで話してしまう。この世でだれを怒らせてもかまわないが、父さんだけは別だ。あの日、小坡は目撃した。父さんが、硬い厳しい表情をして、自分の店の門番をしているインド人に、思い切り二発のびんたをくらわしたのだ。門番のインド人は小坡から見れば「偉い人」だ。その「偉い人」でさえ父さんのびんたを食らうんだから、小坡が仮病で学校に行かなかったことがばれたら、少なくとも四発か八発は食らうに決まっている。そのうえ、父さんは二つも金の指輪をはめているから、それで頭をガンとやられたら、オリーブの実ぐらいの大きなたんこぶができるにちがいない。やっぱり兄さんと一緒に学校に行ったほうがいいだろう。

学校に着いたら、先生がいねむりしているか、机にかぶさるようにして答案を直しているすきに、こっそりと抜け出す。街なかや海岸でいっぱい遊んだら、またこっそり教室に戻って、兄さんと一緒にご飯を食べに家に帰ればいい。どうせ兄さんとはクラスが同じじゃないんだから、わかりっこない。兄さんがわからなければ、母さんにもわからない。母さんがわからなければ、父さんにも知られない。うちの人たちは小さな塔に似ている。ひとつの階のことしかかまわない。いちばん下の階でのことをうまく取り繕っておけば、いちばん上の階では、ばかみたいは何もわからない。ちょっと想像してみて。父さんは塔のいちばん上に腰か

けているおばかさんみたいだ。なんておもしろいんだ！

こうしてみると、学校をサボるのはそんなに危ないことではない。しかし妹はやっかいだ。妹はうわさ話が好きで、すきを見ては小坡から話を聞き出して母さんに報告に行く。

でも妹は話しがわかる。小坡が口を滑らせた時でも、急いで、道で拾った蹄鉄とか教室から持ってきた短いチョークをやると、ちょっと口をとがらすだけで、あとは黙っていてくれる。

いつも、このようなつけ届けをしておけば、正直に学校をさぼったと言っても、妹は信じない。

「仙！ とってもいい、とってもきれいなガラスの小びんを拾ってきたよ！」

「どこ？ お兄ちゃん、私にちょうだい！」

ガラスの小びんが妹の手にわたった。

「仙！ また学校をサボったんだよ！」

「兄ちゃん、そんなことない。小びんを拾いに行ったのに、どうして学校から抜け出せるの？」と言う。

やっぱり妹はかわいい。妹の考え方は何てすばらしいんだ！ それで小坡は学校から抜け出したことを誇張して話して聞かせるのだが、妹は絶対に母さんに告げ口をしない。

「妹をかわいがっていれば、学校をサボったってだいじょうぶだよ！」

小坡は学校の友達にいつもこう言って、サボることを勧めていた。

小坡には二つの望みがあり、妹だけがそれを知っている。門番のインド人（シンガポールのちょっとした大きな店には、みな門番や夜警をするインド人がいる）とマレー人のおまわりさんになることだ。

小坡から見ると、門番で夜警をするインド人はとても堂々としていてかっこい

い！ 大きな白いターバンで頭を巻いていて、赤黒い大きな顔じゅうにふさふさとした長いひげをはやしている。高い鼻、くぼんだ目をしていて、実に立派で幸せそうだ。大きな白いシャツにはいくつかのポケットがあり、全部何かが詰まっている。小坡ジャオポーが思うに、ピーナッツ、えんどう豆、ビンロウ、それにケーキが二切れは入っているのだろう。

あのサラサ模様の腰布はとてもきれいだ。目が覚めるような美しい鮮あざやかな色の生地が毛むくじらの脛すねを覆っていて、その下から黒光りのする二本のはだしの足が突き出ている。

インド人の門番は朝から晩まで、何も考えずにのんびりと門の前に座り、にぎやかな街の様子をながめているだけだ。退屈でたまらなくなると、足の指の間に手の指を入れて遊んでいる。天仙宮1の菩薩ぼさつ様はとてもしりっぱできれいだ、こんな風に自由に足の指に手を突っ込むことはできない。関羽様のおそばはべに侍っている黒と白の二人の将軍は、黒いほうは黒すぎるし白いほうは白すぎて、どちらも、門番のインド人ほどの威厳もなく荒々しさもなく、ちょうどいい黒さでもない。(これはもちろん小坡の表現ではないが、言いたいことはこういうことだろう。) そのうえ、インド人の門番は、夜は門の前で寝るので、部屋の中に入らなくていいし、時間になったら寝なければならないということもない。門の前に横になって街のにぎわいをながめ、店の蓄音機から流れてくる音を聞いていても、母さんが「早く寝なさい」と呼びに来ることもない。(インド人にもお母さんがいるのだろうか。これは問題だ。もしいないのならインド人はとてもかわいそうだ。もしいるのなら、インド人の母さんってとっても背が高いんだろうな?) 眠くなったらすぐ寝てもいい。妹が寝るのを待たないでいい——小坡は毎晩妹が寝るのを待つて蚊帳かやを吊ってやり、毛布をちゃんとかけてやってから、やっと安心して眠る。そうしなければ、女の子たちばかりをいじめる赤目のトラが妹をくわ

えて行ってしまうのではないかと心配なのだ。蚊帳かやをちゃんと吊っておけば赤目のトラは入っては来ることができない。

「仙！ そのうちおまえが大きくなって店を開いたら、僕を門番にしてくれよ。ほら、僕はとても背の高い立派なインド人だろう！」  
妹はしばらく考えてから言った。「私、女の子なのよ。女の子はお店を開いたりしないの！」

「おまえはなれるんだよ、仙！ 男になりたかったら、毎朝おかゆを食べてから庭のヤシの木のところに行って言うんだ。『仙は男になりたい！』そうすれば、だんだんと父ちゃんみたいに背の高い人になれる。でもね、仙、おまえはインド人になっちゃだめだ。僕がインド人になっておまえもインド人になったら、どちらが門番になるかわからなくなるからね！」

「男になってもお店は開かない！」

「じゃあ、何をしたいんだい？ そうか牛車に乗りたいたいだろうか？」

「いやだ！ 牛車に乗りたいたいのは兄ちゃんの方でしょう！」

仙坡は小さな指をえくぼにあてしばらく考えてから、「大きくなったらね、私はね、役人になる！」

シャオポー  
小坡は口を妹の耳元に近づけてそっとささやいた。

「仙！ 役人だって商売だって同じことだよ。いつか父ちゃんが言っていたの、聞かったのかい？ 父ちゃんは中国にいた時、お金をいっぱい払って役人の位くらいを買ったんだって。でもそのあと役人になれなくて大損をして、それでここに来て中国雑貨の店を開いたんだ」

「ふーん、そうなの」

センポー  
仙坡は少しも理解できなかったが、小坡の話がわかったふりをした。

「仙！ 父ちゃんが言ってたよ、商売の方が役人よりずっと儲かるんだって。い

まに兄ちゃんも母ちゃんも店を開く。でも僕は、おまえの店の門番になりたいんだ。仙、ほら、僕はとっつぱなインド人だろ！」

<sup>シャオボー</sup>小坡はそう言いながら首をすっと伸ばした。すると、身長が一気に高くなったような気がした。本物のインド人よりも少し高くなったかもしれない。

<sup>センボー</sup>仙坡は小坡を見て、確かに背の高いインド人のようだと思ったが、なぜかそうなって欲しくないと思って言った。

「ぜったいいや、店は開きたくない！」

小坡はこれ以上、妹に店を開かせようとする、泣きだしてしまいうだろうということがわかった。

「いいよ、仙！ 店を開かなくていいよ。僕もインド人にはならない。僕はマレー一人のおまわりさんになるよ。どうだい？」

妹はこっくりとうなずいた。

マレー一人のおまわりさんは肩の後ろに藤で編んだ盾をつけていて、盾の両端は肩から一尺（約30cm）ほど出ているので、まっすぐに立っていると十字架にそっくりになる。おまわりさんが南に向くと、南北方向に行ったり来たりしていた牛車、馬車、電車、自動車、人力車がみんなすぐに止まり、東西方向を行ったり来たりするために道路で止まっていた車が、いっせいに走り出す。おまわりさんがとつぜん体を回して東を向くと、東西方向を行き来していた車がみんな止まり、南北方向への車が走り出す。これは何てかっこよくて面白いんだ！ もしも小坡がおまわりさんになって、あの長い盾を肩につけ、ぱっと南を向いたり東を向いたりして、いろんな車を思い通りに止めたり走らせたりできたら、何て面白いんだろう！ 楽しくなってきたら大通りの真ん中でコマのように体を回して、まわりの車を全部ぶつけさせる。そしたらきっと大騒ぎになるだろう！

妹も小坡のこの考えに賛成したが、こう言った。

「お兄ちゃん！ 車がもしみんなぶつかったら、車の中の人たちはけがするんじゃないの？」

<sup>シャオポー</sup>小坡はいつも妹の意見を大事にしている。それにもともと心の優しい子供だったから、車に乗っているおじいさん、おばあさん、娘さんたちの耳や鼻をけがさせるつもりはなかった。

「仙、いい考えを思いついた。ぼくがぐるぐる回る時は、まず大声で言う。『回りますよー。車に乗っている人は早く飛び降りてくださいーい！』って。こうすれば車だけがぶつかって、人はけがしないだろう？」

<sup>センポー</sup>仙坡は、これはとても面白いと思った。そして「兄ちゃん！ 兄ちゃんがおまわりさんになったときには、ぜったいに大通りの大騒ぎを見に行くからね」と言った。

小坡は妹が味方をしてくれたことにちょっと感謝して、しっかり言い聞かせた。「でもね、仙、おまえはぼくから離れたところに立ってなきゃいけないよ。車にぶっつけられないようにね！」

小坡は、ほんとうに妹のことが大好きなのだ！

- 1 天仙宮……Thian Hock Keng Temple。1841年に建立されたシンガポール最古の寺院で、海の女神天后（媽祖）が祀られている。



(中国語原文)

## (一) 小坡和妹妹

老舍

哥哥是父亲在大坡开国货店时生的，所以叫作大坡。小坡自己呢，是父亲的铺子移到小坡后生的；他这个名字，虽没有哥哥的那个那么大方好听，可是一样有来历，不发生什么疑问。

可是，生妹妹的时候，国货店仍然是开在小坡，为什么她不也叫小坡？或是小小坡？或是二小坡等等？而偏偏的叫作仙坡呢？每逢叫妹妹的时候，便有点疑惑不清楚。据小坡在家庭与在学校左右邻近旅行的经验，和从各方面的探听，新加坡的街道确是没有叫仙坡的。你说这可怎么办！这个问题和“妹妹为什么一定是姑娘”一样的不能明白。哥哥为什么不是姑娘？妹妹为什么一定叫仙坡，而不叫小小坡或是二小坡等等？简直的别想，哎！一想便糊涂得要命！

妈妈这样说：大坡是在那儿生的，小坡和仙坡又是在那儿生的，这已经够糊涂半天的了；有时候妈妈还这么说：哥哥是由大坡的水沟里捡来的，他自己是从小坡的电线杆子旁边拾来的，妹妹呢，是由香蕉树叶里抱来的。好啦，香蕉树叶和仙坡两字的关系又在哪里？况且“生的”和“捡来的”又是一回事，还是两回事？“妈妈，妈妈，好糊涂！”一点儿也不错。

也只好糊涂着吧！问父亲去？别！父亲是天底下地上头最不好惹的人：他问你点儿什么，你要是摇头说不上来，登时便有挨耳瓜子的危险。可是你问他的时候，也猜不透他是知道，故意不说呢；还是他真不知道，他总是板着脸说：“少问！”“缝上他的嘴！”你看，缝上嘴不能唱歌还是小事，还怎么吃香蕉了呢！

问哥哥吧？呸！谁那么有心有肠的去问哥哥呢！他把那些带画儿的书本全藏起去不给咱看，一想起哥哥来便有点发恨！“你等着！”小坡自己叨唠着：“等我长大发了财，一买就买两角钱的书，一大堆，全是带画儿的！把画儿撕下来，都贴在脊梁上，给大家看！哼！”

问妹妹吧？唉！问了好几次啦，她老是摇晃着两条大黑辫子，一边儿跑一边娇声细气的喊：“妈妈！妈妈！二哥又问我为什么叫仙坡呢！”于是妈妈把妹子留下，不叫再和他一块儿玩耍。这种惩罚是小坡最怕的，因为父亲爱仙坡，母亲哥哥也都爱她，小坡老想他自己比父母哥哥全多爱着妹妹一点才痛快；天下那儿有不爱妹妹的二哥呢！

“昨儿晚上，谁给妹妹一对油汪汪的槟榔子儿？是咱小坡不是！”小坡搬着胖脚指头一一的数：“前儿下雨，谁把妹妹从街上背回来的？咱，小坡呀！不叫我和她玩？哼！那天吃饭的时候，谁和妹妹斗气拌嘴来着？咱，……”想到这里，他把脚指头拨回去一个，作为根本没有这么一大回事；用脚指头算账有这么点好处，不好意思算的事儿，可以随便把脚指头拨回一个去。

还是问母亲好，虽然她的话是一天一变，可是多么好听呢。把母亲问急了，她翻了翻世界上顶和善顶好看的那对眼珠，说：

“妹妹叫仙坡，因为她是半夜里一个白胡子老仙送来的。”

小坡听了，觉得这个回答倒怪有意思的。于是他指着桌儿底下摆着的那几个柚子说：“妈！昨儿晚上，我也看见那个白胡子老仙了。他对我说：小坡，给你这几个柚子。说完，把柚子放在桌儿底下就走了。”

妈妈没法子，只好打开一个柚子给大家吃；以后再也不提白胡子老仙了。妹妹为什么叫仙坡，到底还是不能解决。

大坡上学为是念书讨父母的喜欢。小坡也上学——专为逃学。设若假装头疼，躺在家里，母亲是一会儿一来看。既不得畅意玩耍，母亲一来，还得

假装着哼哼。“哼哼”本来是多么可笑的事。哼，哼哼，噗哧的一声笑出来了。叫母亲看出破绽来也还没有多大关系，就是叫她打两下儿也疼不到那里去。不过妈妈有个小毛病：什么事都去告诉父亲，父亲一回来，她便嘀嘀咕咕，嘀嘀咕咕，把针尖大小的事儿也告诉给他。世上谁也好惹，就是别得罪父亲。那天他亲眼看见的：父亲板着脸，郑重其事的打了国货店看门的老印度两个很响的耳瓜子。看门的印度，在小坡眼中，是个“伟人”。“伟人”还要挨父亲两个耳光，那末，小坡的装病不上学要是传到他老人家耳朵里去，至少还不挨上四个或八个耳瓜子之多！况且父亲手指上有两个金戒指，打在脑袋上，口邦！要不起个橄榄大小的青包才怪！还是和哥哥一同上学好。到学校里，乘着先生打盹儿要睡，或是爬在桌上改卷子的时候，人不知鬼不觉的溜出去。在街上，或海岸上，玩耍够了，再偷偷的溜回来，和哥哥一块儿回家去吃饭。反正和哥哥不同班，他无从知道。哥哥要是不知道，母亲就无从知道。母亲不知道，父亲也就无从晓得。家里的人们很象一座小塔儿，一层管着一层。自要把最底下那层弥缝好了，最高的那一层便傻瓜似的什么也不知道。想想！父亲坐在宝塔尖儿上象个大傻子，多么可笑！

这样看来，逃学并不是有多大危险的事儿。倒是妹妹不好防备：她专会听风儿，钻缝儿的套小坡的话，然后去报告母亲。可是妹妹好说话儿，他一说走了嘴的时候，便忙把由街上捡来的破马掌，或是由教堂里拾来的粉笔头儿给她。她便菴菴着小嘴，一声也不出了。

而且这样贿赂惯了，就是他直着告诉妹妹他又逃了学，妹妹也不信。

“仙！我捡来一个顶好，顶好看的小玻璃瓶儿！”“那儿呢？二哥，给我吧！”

小玻璃瓶儿换了手。

“仙！我又逃了学！”

“你没有，二哥！去捡小瓶儿，怎能又逃学呢？”

到底是妹妹可爱，看她的思想多么高超！于是他把逃学的经验有枝添叶的告诉她一番，她也始终不跟妈妈学说。“只要你爱你的妹妹，逃学是没有危险的！”小坡时常这样劝告他的学友。

小坡有两个志愿，只有他的妹妹知道：当看门的印度，（新加坡的大一点的铺户，都有印度人看门守夜。）和当马来巡警。

据小坡看：看门守夜的印度有多么尊严好看！头上裹着大白布包头，下面一张黑红的大脸，挂满长长的胡子，高鼻子，深眼睛，看着真是又体面又有福气。大白汗衫，上面有好几个口袋儿，全装着，据小坡猜，花生米，煮豌豆，小槟榔，或者还有两块鸡蛋糕。那条大花布裙子更好看了，花红柳绿的裹着带毛的大黑腿，下面光着两只黑而亮的大脚鸭儿。一天到晚，不用操心做事，只在门前坐着看热闹，所闲得不了啦，才细细的串脚鸭缝儿玩。天仙宫的菩萨虽然也很体面漂亮，可是菩萨没有这种串脚鸭缝的自由。关老爷两旁侍立的黑白二将，黑的太黑，白的又太白，都不如看门的印度这样威而不猛，黑得适可而止。（这自然不是小坡的话，不过他的意思是如此罢了。）

况且晚上就在门前睡觉，不用进屋里去，也用不着到时候就非睡去不可。门前一躺，看着街上的热闹，听着铺户里的留声机，妈妈也不来催促。（老印度有妈妈没有，还是个问题。设若没有，那末老印度未免太可怜了；设若有呢，印度妈妈应该有多么高的身量呢？）困了呢，说睡就睡，也不用等着妹妹，——小坡每天晚上等着妹妹睡了，替她放好蚊帐，盖好花毯，他自己才敢去睡。不然，他老怕红眼儿虎，专会欺侮小姑娘们的红眼儿虎，把妹妹叼了去；把蚊帐放好，红眼儿虎就进不去了。

“仙！赶明儿你长大开铺子的时候，叫我给你看门。你看我是多么高大，多么好看的印度！”

“我是个大姑娘，姑娘不开铺子！”妹妹想了半天这样说。“你不会变吗？仙！你要是爱变成男人呀，天天早晨吃过稀饭的时候，到花园里对椰子树说：仙要变男人啦！这样，你慢慢的就变成父亲那么高的一个人。可是，仙！你别也变成印度；我是印度，你再变成印度，咱们谁给谁看门呢！”“就是变成男人，我也不开铺子！”

“你要干什么呢？仙！啊，你去赶牛车？”

“呸！你才赶牛车呢！”仙坡用小手指头顶住笑涡，想了半天：“我长大了哇，我去，我去作官！”

小坡把嘴搁在妹妹耳朵旁边，低声的嘀咕：“仙！作官和作买卖是一回事。那天你没听见父亲说吗：他在中国的时候，花了一大堆钱买了一个官。后来把那一堆钱都赔了，所以才来开国货店。”

“呸！”仙坡一点也不明白，假装明白了二哥的话。“仙！父亲说啦，作买卖比作官赚的钱多。赶明儿哥哥也去开铺子，妈妈也去开铺子。可是我就爱给‘你’看门。仙，你看，我是多么有威风的印度！”小坡说着，直往高处拔脖子，立刻觉得身量高出一大块来，或者比真印度还高着一点了。

仙坡看着二哥，确是个高大的印度，但是不知为什么心中有点不顺，终于说：“偏不爱开铺子吗！”

小坡知道：再叫妹妹开铺子，她可就要哭了。

“好啦，仙！你不用开铺子啦，我也不当印度了。我去当马来巡警好不好？”

妹妹点了点头。

马来巡警背上打着一块窄长的藤牌，牌的两端在肩外出着，每头有一尺多长。他站定了的时候，颇似个十字架。他脸朝南的时候，南来北往的牛车，马车，电车，汽车，人力车，便全咯噔一下子站住；往东西走的车辆忽

啦一群全跑过去。他忽然一转身，脸朝东了，东来西往的车便全停住，往南北的车都跑过去。这是多么有势力威风，趣味！假如小坡当了巡警，背上那块长藤牌，忽然面朝南，忽然脸向东，叫各式各样的车随着他停的停，跑的跑，够多么有趣好玩！或者一高兴，在马路当中打开捻捻转儿，叫四面的车全撞在一块儿，岂不更加热闹！

妹妹也赞成这个意思，可是：“二哥！车要是都撞在一处，车里坐的人们岂不也要碰坏了吗？”

小坡向来尊重妹妹的意见，况且他原是软心肠的小孩，没有叫坐车的老头儿，老太太，大姑娘们把耳朵鼻子都碰破的意思。他说：

“仙！我有主意了：我要打嘀溜转的时候，先喊一声：我要转了！车上的人快都跳下来！这么着，不是光撞车，碰不着人了吗？”

妹妹觉得这真好玩，并且告诉他：“二哥！等你当巡警的时候，我一定到街上看热闹去。”

小坡谢了谢妹妹肯这样赏脸，并且嘱咐她：“可是，仙！你要站得离我远一些，别叫车碰着你！”小坡是真爱妹妹的！

(『中国名家经典童话—老舍选集』 同心出版社，北京，2009，pp. 28—34，.)

